

「戦争の愚かさ」

ウクライナ情勢に心が痛む。侵略戦争とも言えるし内紛とも考えられるが、蛮行が繰り返されていることは言うまでもない。プーチンを非難したところで、停戦への兆しが見えるわけでもない。頼みの国連も相変わらず無力である。

人類はこの戦争という愚かな行為を、いつの世も歴史的に繰り返し続けている。確かに核兵器の登場や世界的なハイテク化の進行により、戦争のあり方は大きく変わったと言える。核抑止力への依存により、世界のどこかで武装勢力の小競り合いなどがあっても、まさか侵略的な戦争など勃発しないものと思ってきた。ウクライナ紛争は 80 年前のヒトラーによるポーランド侵攻とそっくりで、独裁者は今もなお存在するが、全ては世界が国家レベルで戦争を容認していることに起因する。

例えば「生物化学兵器禁止条約」があるが、これは「戦争は勃発しても仕方がないが、この非人道的兵器は使用しないように」という同意書である。こんな同意書が無意味であることは、国家レベルではすでには常識的に認識されている。レベル的には核抑止力と同様に頼みの綱に過ぎないだろう。

日本のとある党委員長が、「プーチンのようなリーダーが存在しても、他国への侵略ができないようにするための条項が、憲法 9 条である」と発言した。これは世界レベルでの戦争放棄の確かな動きを憲法レベルで実現しようという壮大なロマンへの模索であり、彼は国家権力を管理する憲法の重大性を述べたに過ぎない。にもかかわらず、元首相は「それは幻想」と反論し、非核三原則を形骸化する「核共有論」を持ち出してきたのには驚いた。さらに彼への批判の多くは「攻められたらどうするのか？」というものばかりであり、誰も彼の真意を理解していない。攻められたら終わりなのだ。

こんな話をぶつぶつ嘆いていたら、隣にいた妻が「恐竜が絶滅したように、一度人類も絶滅したほうが良いかも？ 核戦争で絶滅しても深い深海では生物が生き延びて、再びホモサピエンスが新たに出現するかも？」ととんでもないことを言い出した。死にたくない！

(丹羽 豊)